

(別紙2)

## 論文審査の結果の要旨

氏名 新谷正雄

本論文は、『万葉集』の男女の贈答歌を細密に読むことで、その表現の機制に深く分け入り、それによって古代和歌の表現のもつ独自性を明らかにしようと試みた論である。問題意識の鮮明な、構成・内容ともにすぐれた論である。全体は二部六章及び付論からなる。

「第一部 歌表現の中の「男と女」」は、二つの章からなる。「第一章 贈答歌表現の研究」は、男女の贈答歌を支える表現論理がどのようなものであったのかを、いくつかの具体例の徹底的な分析を通じて考察する。男女の贈答歌の基盤が、共同体を異にする同士が出逢う歌垣の場にあること、そこに交わされる歌が互いの異和をそれぞれの秩序に取り収めようとする機能を持つことを指摘して、そこに見られる対立と調和の表現の本質を明らかにする。従来、表面的な解釈に留まっていた男女の贈答歌を、その表現論理に迫ることで原理的に把握し、統一した理解への道筋を提示しえたことは、大きな成果といえる。「第二章 歌言葉に見る「男と女」」は、第一章の成果を受け、「斎ひ」「嘆き」「人言」「隠妻」という歌言葉の分析を通じて、その言葉を含む個々の歌に対する新たな解釈を提示したものの。ある場合には古代人の靈魂観の具体的な検証を通じてその精神史に参入し、またある場合には過去の埋もれていた学説に再び光りを当ててその再評価をはかるなど、これまで表面的な理解しか与えられて来なかった歌言葉について深い考察を加えている。その際、恣意的な見方が入ることをできる限り排除しようとする意図から、用例に対する厳密な本文批判を加え、禁欲的とも言えるような態度で分析を進めている。「人言(=他人の噂)」という歌言葉が、周囲の共同体から隔絶した恋人だけの世界の構築を意図した言葉であったとする指摘などきわめて斬新であり、今後の相聞歌研究に大きな刺激を与えるものといえる。

「第二部 「遊行女婦歌」表現論」は、序章を含め四つの章からなる。遊行女婦とは官人などの宴席に侍する遊女の意だが、その認定にはしばしば混乱があった。この第二部は、「遊行女婦」と明示のあるものに対象を絞り、その歌を厳密に検証することによって、遊行女婦の歌の特徴がどこにあるかを明らかにしている。すなわち遊行女婦の歌とは、男とは一対一の対の関係を決して結ぶことのない、また男集団(主として官人集団)の外部にあって、それを讃美するような表現性をもつ歌であることを指摘する。これによって、従来、遊行女婦の作かどうかの認定の難しかった歌を考える際の、重要な指標が与えられたことになり、これまた今後の研究を大きく進展させるものといえる。

本論文は、考察の対象を厳密に認定するところに出発点を置いている。その学問的態度はたしかに正当なものだが、具体的な論述に際してはやや窮屈さを感じさせるところもなしとしない。しかしながら、それは瑕瑾といえる程度のものであり、男女の贈答歌の表現の本質を明らかにした本論文の価値を少しも損なうものではない。よって、審査委員会は本論文が博士(文学)の学位に値するとの結論に達した。

なお、評価に入れるべきことではないが、多年勤続した職を辞して学問の道に志し、いわば晩学でありながら、その結果を千枚を越える浩瀚な学位論文として提出しえたことは、賞賛に値する。この点を付記する。